リサしか見えない

春也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リサしか見えない

【Ｎコード】
Ｎ４８０９Ｅ

【作者名】
春也

【あらすじ】
いつの間にかなくてはならない存在となっていたリサ。リサを失った聡志が再出発してゆくまで描いた物語。ジャンル指定を間違えたとは思っていません。

ピ――――――

かすかな希望を映し出したモニターの反応が消え、最期を告げる電子音が非情に鳴り響いた途端、聡志は支えを失ったようにがっくりと膝を落とした。

「そんな……」

聡志は小さくつぶやく。その顔からは血の気が引き、もはや永遠に目覚めることのない「モノ」と化したそれを焦点の合わない目でじっと見つめていた。

「嘘だろ……なぁ？　そんなわけないよな？」

聡志の必死な声にも答えはない。なぜなら彼の問いかける相手はもう、永遠に返事をすることが出来ないのだから。

いつかこういう日がやってくると、聡志も分かっていなかったわけではない。人間は、いや人間に限らず、この世にある全てのものはいつかその生を失う。そしてひとつの生に与えられた時間は限られたものでしかない。ましてや二つの生と生が触れ合う時間など、本当にごくわずかなのだ。だから人間はその生に感謝し、他の生との出会いを喜び、時には互いを愛し合い、限られた人生をを精一杯生きるのだ。

そんなごく当たり前のことを聡志が思い知らされたのは、彼の人生にとって最も大切な存在であるリサが、突然余命半年を宣告されたあの日だった。

かつては何をするにも自信がなく俯いてばかりだった聡志が、リサと出会ってからは大きく変わった。リサがそばにいるだけで、どんなつらい仕事も乗り越えられるような気がした。一人暮らしでどこか空虚だった彼の部屋に、リサが彩りをもたらしてくれた。リサを見て、リサに触れて。聡志の生活はリサ無しでは考えられないものになっていた。

それがいつからだろうか。聡志の中で出会った頃のような感動やときめきは薄れ、徐々にリサの嫌な部分やだめな部分が目につくようになった。ついカッとなって冷たく当たったり、時にひどく傷付けるようなこともした。知らないうちに聡志は心のどこかでリサが自分のために尽くすのは当然だ、これからもリサが自分から離れていくことはない、などと思うようになってしまっていたのだ。

そんなある日。聡志がリサとの生活を始めて五年ほど経った頃から、リサの様子に異変が起こり始めた。突然周りとの関わりを嫌がるようになり、接触してくるものを怯えるようにして拒み始めた。今までなら難なくこなしていたはずの家の中での仕事をするのでさえ、見ているこちらが心苦しくなるほど苦労しながらするようになった。ひどい時にはほとんど一日中何をすることもできず、聡志の呼びかけにも曖昧な反応を返すのがやっと、という日もあった。

あまりに短いリサの寿命を知ってしまったとき、聡志はひどく己を責めた。リサを苦しめたのは自分だ。今までリサが何も言わないのをいいことに辛いことや苦しいこと、何もかもをリサに押し付け

てきたから、耐えられなくなったリサの頭はパンクしてしまったのだ。自分がもっとリサのことを気遣ってやれば、リサはもっと長く生きられたかもしれない。これほどまでにリサの苦しむ姿を見ることはなかったのかもしれない。

しかし聡志がどんなに今までの行いを悔いたところで、それはもう手遅れだった。リサはすでに、最期の時を待つことしかできない状態となっていたのだ。

醒めることのない眠りに就いたリサに聡志の手がそっと触れる。もう永遠に止まったままのリサの体の芯は、まだ確かに熱を帯びている。

「聡志！」

その時、荒々しい声と共にドアが開き、一人の男が部屋へと駆け込んできた。

「健二……」

力なく振り向く聡志の様子を見て、健二と呼ばれた男はすぐにすべてを悟りリサの元へ駆け寄った。

「だめだったか……」

健二の言葉に聡志は無言で頷く。いつの間にか甲高い電子音はやみ、部屋は不思議なほど静まり返っていた。

「すまなかったな。結局こいつをなおす方法、見つけてやれなかった」

「いいんだよ健二、お前のせいじゃないさ」

聡志はリサからそっと手を放す。

「それにこいつはもう、十分頑張ったんだ。半年持てば奇跡だなんて言われてから一年以上も持ちこたえたんだぜ？　きっとこれ以上はもう、どうしようもないんだよ……」

「聡志、じゃあお前……」

「何も言うな、健二」

健二の言いかけた言葉を、聡志は強い口調で遮る。

「俺だってわかってるんだ。ここでくよくよしていてもしょうがないことくらい。やるべき仕事だって、まだたくさん残ってる」

「だったら……」

「でもな、お前だって分かってるだろ？　俺という人間を。俺にはこいつしかいないんだ。こいつ以外に俺のパートナーをできるものなんて、存在しないんだよ……」

そう言ってうつむく聡志の肩を健二はぽん、と叩いた。

「そんなことないさ。確かにこいつと同じものはもう存在しないかもしれないけれど、かわりなんていくらでも探せるさ。第一、聡志

が少し努力すればどうにかなる問題じゃないか。お前だって頑張ればきっと……」

「気休めはいらねえんだよ！」

聡志は肩に乗せられた手を乱暴に振り払った。

「そりゃ健二にしてみれば簡単なことだろうよ。だけど俺はお前みたいに器用じゃないんだ。こいつ以外の訳のわからない新しいやつなんか持ってきたって、俺にどうにかできる訳ないだろ？　こいつがいなきゃ俺は、もう……」

聡志は知っているのだ。リサのかわりが務まるのは、リサでしかないことを。そして、聡志がリサを再び見つけ出すことは、もうほとんど不可能であるということも。

「ふざけるな！」

聡志の言葉を静かに聞いていた健二だったが、いきなり聡志に迫っていき苛立ちをあらわにしてそう言い放った。

「俺だってリサのいいところは十分知ってるよ。だからお前にはこいつがぴったりだと思って、あの時俺はお前にリサを紹介してやったんだよ。だけどな、時代は変わったんだ。周りを見てみろ、今でもリサにこだわってるやつなんてお前しかいないんじゃないのか？」

じりじりと健二の顔が迫ってくる。核心を突かれた聡志は、ばつが悪そうに顔をそむけた。

「そんなこと言われたって……無理なものは無理なんだよ……」

聡志がこれほどまでリサにこだわるのには理由があった。聡志が初めて健二からリサの写真を見せられた時、写真の下に書かれていたあのキャッチコピーが頭から離れないのだ。

“あなたも三日でマスター！　サルにも使えるラクラクＰＣ『Ｌｉｓａ（リサ）』　世界一簡単なパソコンがここに誕生！”

このキャッチコピーで七年前、全国のパソコン初心者のハートをわしづかみにした新型パソコン・リサ。

名前に恥じない驚異的な扱いやすさで、買ったその日に子供でも扱えようになると言われたパソコン界の革命児・リサ。

しかしあまりに操作のわかりやすさを追求したために機能性が恐ろしく乏しい上、セキュリティも穴だらけであると判明し一年ほどで生産中止となった、今では幻の珍商品とさえ呼ばれる前時代の家庭用コンピュータ・リサ。

今では中古品ですら見つけ出すことが困難なこれを、聡志が再び手にすることはおそらくないだろう。

「リサの操作を覚えるのでさえ一年以上かかったっていうのに、今さら新しいパソコンなんて……」

それから数か月。聡志は今まで通りに仕事を続けている。彼の心の傷も少しずつ癒え始めている。

「えっと……ここで改行……ってあれ？　そうじゃなくて、うーんと……」

それでもやはり、聡志にはリサ以外考えられないのだ。彼がリサ以外を使いこなすことなど、不可能に近かった。彼の家からは、今日も悲鳴がこだまする。

「あぁっ、ビスタの使い方なんかわかんねぇよ！」

聡志の機械音痴が治るのはまだまだ先のことらしい。

（後書き）

どうも、春也です。久々に投稿いたしました。
二回読めばこの話の内容は把握できるかと思います。途中でオチが分かってしまったという方、申し訳ありません。未熟者の作品としてどうかご容赦ください。
最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

追伸
この作品を、二年前に他界した我が家の初代パーソナルコンピュータに捧げます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4809e/

リサしか見えない

2011年1月6日14時28分発行